神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

About "紇 hé" in the tribe name "回紇 huíhé"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2004-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 斎, Ota, Itsuku メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/731

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「回紇 huíhé」の「紇 hé」

太田　斎

§1. 唇音反切下字は開合の対立を混乱させる

開合の対立の無い唇音字は，開口帰字の反切下字にも合口帰字の反切下字にも用いられる。そうなると，反切下字が唇音の反切は反切系聯法だけに頼っては開合の区別が判断できなくなってしまう。それを忌避した結果であるのか，唇音の反切下字は実際には他の声母のそれに比べ使用頻度はそれほど高くはなく，使われる場合は上字も唇音の場合が多い。しかし中にはそうでないものもある。以下に該当例の一端を挙げる。参考までに各字に拼音による普通話の発音と平山1967推定の中古音音価を示しておく。両者は声調記号の有無で区別される。

例えば『広韻』黠韻（ɐt,uɐt）に以下のような例がある。

黠 xiá　：胡 hú 八 bā 切

ɦɐt　　ɦo　p(u)ɐt

滑 huá　：戸 hù 八 bā 切

ɦuɐt　　ɦo　p(u)ɐt

この二つの反切の反切下字は同じで，上字は「胡」は模韻所属，「戸」は模韻に相配する上声の姥韻所属で，声調以外は違いが無かったと考えられる。上字の声調の違いが下字の u 介音を取るか取らないかの条件となっている訳ではなく，仮に「黠：戸八切」，「滑：胡八切」というふうに反切を取り替えたとしても状況は同じである。つまり，このような反切において u 介音を活かすか否かは場当たり的で，決して一意的ではない。

上田1975の推定する原本切韻で陌韻の反切を見ると，「格」（普通話 gé）を代表字とする小韻の反切は「古 gǔ 陌 mò 切」となっており，「虢」（普通話 guó）の字を代表字とする反切もまた「古 gǔ 伯 bó 切」となっている。「陌」，「伯」の違いは中古音においても声母だけで（中古音 m：p），韻母の部分に違いは無かったはずである。両者はその反切を一見すると同音であるかのようだが，現代音の例として挙げた「格」，「虢」両者の普通話の発音は違っている。先の例同様に，拼音及び推定音価を用いて説明すると，

格 gé　：古 gǔ 陌 mò 切

kak　　ko　m(u)ak

虢 guó　：古 gǔ 伯 bó 切

kuak　　ko　p(u)ak

前者では合口介音を捨て，後者では活かしているのである。これが『広韻』になると，前者の反切も「古伯切」となっており，後者と全く同じ字面で，まるで一方が重複して現れる増加小韻であるかのような様相を呈している。『広韻』は切韻系韻書の決定版であるから，最も誤りの少ないものであるが，それでもこのような状況がある。それ以前のテキストだと，例えば，王三に「蝗 ɦuaŋ：胡孟反」，「行 ɦaŋ：胡孟反」（『広韻』だと前者は「蝗：戸孟切」）というペアがある。周知の如く，切韻系韻書では反切を「～反」と表示するものと「～切」で表示するものがある。本稿では両者の違いが議論を展開するに当って有意味的となることはないので，以下，反切を提示する場合に煩瑣となるのを避けて，上字，下字の二字のみを挙げ，「～反」，「～切」としない場合がある。切韻系韻書の略称に関しては『十韻彙編』に従った。

§2. 開合分韻の混乱

中国音韻学の常識に属することであるが，『広韻』の韻目は全部で206韻であり，原本切韻の推定韻目総数193に比べると，13の韻目が増えている。増加は咸摂の厳韻に相配する上声の儼韻，去声の釅韻から独立させた凡韻に相

配する上声の范韻，去声の梵韻を除けば，いずれも開合による分韻の結果で，例えば臻摂の真，軫，震，質は本来開口の韻類と合口の韻類を内に含むものであったが，合口の韻類を析出して諄，準，稕，術韻を新たに建てた。山摂の寒，旱，翰，曷韻；果摂の歌，果，箇韻も同様で，合口韻類を析出して，それぞれ桓，緩，換，末韻；戈，果，過韻を建てた。内に開口，合口二種の韻類を含む韻目はこれだけに止まらないのに，何故このような中途半端な分韻で終わってしまったのか謎であるが，今それについては問題としない。

§3. 真—臻の混乱

臻摂における分韻は他の分韻に比べると杜撰の印象を拭えない〔補〕。原本切韻の段階からある真韻と臻韻の分韻についてはさて措くとして，『広韻』において真，軫，震，質韻と諄，準，稕，術韻の間に見られる混乱を以下に示す。

帰字開口韻所属だが実際は合口

牙音全清　平声　麏：居筠切　真韻

牙音次清　平声　囷：去倫切　真韻（反切下字の倫は諄韻所属）

牙音全濁　上声　窘：渠殒切　軫韻

歯音全清　入声　率：所律切　質韻（反切下字の律は術韻所属）

喉音全清　平声　贇：於倫切　真韻（反切下字の倫は諄韻所属）

喉音全清　入声　獝：況必切　質韻（増加小韻）＝𤞷：許聿切（術韻）

喉音全清　入声　颶：于筆切　質韻

喉音次濁　平声　筠：為贇切　真韻

喉音次濁　上声　殒：于敏切　軫韻（韻鏡に収録されず）

帰字合口韻所属だが実際は開口

舌音全清　上声　扆：珍忍切　準韻（反切下字の忍は開口の真韻上声軫

韻所属）

牙音次清　上声　蟶：弃忍切　準韻（反切下字の忍は開口の真韻上声軫韻所属）

『集韻』ではこの類の混乱は更にひどくなっているが，『切韻』とは体系を異にするので，指摘のみに留める。『韻鏡』ではこれらの小韻を開合で正確に分けているが，開合に関して全く無謬という訳ではない。第17転開の云母の平声「囷」，上声「隕」，入声「颶」はいずれも合口であるから，第18転合の同じ位置（喉音清濁三等の欄）に置かれるべきものである。第18転合を見ると，上，去声の同じ位置は空欄となっているので，この2字をそのままそこに移せば良いが，平声には「筠」があって，衝突することになる。『広韻』によれば，真韻「筠：為倫切」小韻中に「囷」がある。つまり，両者は同音であるので，あるべき姿としては，どちらか一方が選択されて第18転合に配されることになる。切韻系韻書の中で，この小韻の存在が確認できるのは他に王三しかない。王三でもまた「筠」が小韻代表字になっているから，「筠」を採って，「囷」を捨てることになるだろう。云母字は極僅かな例外を除き，合口のものしかない。[(1)] 仙韻の開口「潟：有乾」：合口「員：王権」の一例以外，開合の対立が無いから，臻摂の転図である第17転開，第18転合において，誤って開口の転図に配してしまったと考えられる。なお，真（諄）韻を開合で分韻している『広韻』での三字の所属を見ると，「囷」は諄韻ではなく真韻，「隕」は準韻ではなく軫韻（上掲例中「殞：于敏切」小韻所属），「颶」は術韻ではなく質韻，といずれも開口韻となっている。『韻鏡』の誤りは所拠切韻にあった分韻の誤りを受け継いでしまったものであろう。

実は切韻の真韻の開合による分韻は現存切韻系韻書の中では『広韻』の他だと，後に示すように，王一，P2016（韻目一覧のみ残っている），蔣斧本唐韻残巻（入声を分ける。平，上，去声部分は残っていないので分けていたかどうか不明）のみに見られるもので，比較的後の時代の改訂なのではない

かと思われる。不完全な形で開合を分けた結果，開口の真韻に一部合口小韻が，合口のはずの諄韻真韻にも一部合口小韻が含まれるようになっているのだが，『広韻』を仔細に検討すると，真韻の合口小韻，諄韻の開口小韻はどちらについても末尾近くに置かれて，増加小韻の様相を呈しているものが多い。概略，既存の小韻に関してはちゃんと分けたが，追加の小韻の処理はいい加減であったと言えるかも知れない。『広韻』（或いはそれに先立つP2016，唐韻）の編集に当って，この追加部分の作業の担い手が異なるのであろうか？残念ながら，P2016，唐韻いずれも断片的にしか残っていないので，この問題を解明することができない。本来なら，真韻の合口小韻は諄韻に，諄韻の開口小韻は真韻に収めるべきであったことは言うまでもない。もしこのような増補改訂が更に続くと，究極的には真韻，諄韻双方が開合両方の韻類を満遍なく揃えることになり，両者は見かけ上音韻論的対立を成すことになる。六朝期の韻書に基づいて原本切韻が編まれるときにも，このような状況があった可能性は十分にあるが，本稿ではこの点については論じない。

§4. 痕—魂の混乱そしてウイグル

唇音が開合の対立を混乱させ，分韻にも影響が及んでいる状況を挙げよう。同じ臻摂の一等韻である『広韻』11没韻所属の「麧：下没切」が問題となる小韻である。痕韻とそれに相配する上去声の很，恨韻；魂韻とそれに相配する上，去，入声の混，没韻を推定音価を挙げて，対比させて見ると，以下のようになる。数字は『広韻』の韻目順だが，このような開合の別による二系列の分韻は原本切韻から見られるものである。

平声	上声	去声	入声
23 魂　uən	21 混　uən	26 慁　uən	11 没　uət
24 痕　ən	22 很　ən	27 恨　ən	(ət)

これで分かる通り，24痕韻 ən には相配する入声韻 ət が無い。但し，『広韻』の25魂韻 uən に相配する入声11没韻 uət を見ると，匣母小韻には先に挙げた「麧：下没切」の他にもう一つ，「搰：戸骨切」というのがある（没韻には他に同一声母の小韻が重複して現れることは無い）。上掲の魂韻から恨韻までの一連の韻は内に一等韻しか含まず，没韻も例外ではない。ということはこの二つの小韻の違いは開合の違いであろうということになる。つまり24痕韻 ən と23魂韻 uən は開合の別で韻を分けているが（VE の部分は同じ），24痕韻 ən に相配する入声韻 ət は該当するものが僅か１つの小韻しかないため，合口韻の23魂韻 uən に相配する11没韻に間借りさせたというふうに解釈できる。[2] 先に指摘したように「麧：下没切」は唇音下字をとっているから，開口，合口のいずれでもあり得る。これに対して「搰：戸骨切」の反切下字「骨 kuət」は疑いなく合口であるから，「搰：戸骨切」は合口。従ってもう一方の「麧：下没切」は開口というふうに判断される。そこで一応，上の対比では痕韻に相配する入声韻のところに（　）に入れて推定音価を挙げておいた。

しかし，初期の切韻では両者を分けていない。恐らく，切韻の増補改訂に携わった何者かが，本来「麧」と同音である「搰」の他書に見える反切「胡没切」（？）を「下没切」と別音を示すものと誤認したか，[3] 或いは「搰」に附された何らかの又切の字面を取り違えて「下没切」とは別の音を示すものと誤認したものであろう。その結果，「搰」以降の同音字を「戸骨切」という反切で括って，増加小韻としてしまった。そこで，残った「麧」から「搰」直前の字までを含む「下没切」小韻はこれと開合の対立を成すものと見なされ，開口扱いとなったのであろう。以下の当該小韻部分を有する切韻残巻を参照されたい。各字に冠した数字は出現順を示す。但し，王一及び唐韻は開合で分けているので，混同を避けて一方の出現順を abc で示した。

切三(S2071)	王一(P2011)	P3694	王二	王三	唐韻
1 麧:下没	1 麧:下没	1 麧:下没	2 麧	1 麧:下没	1 麧:下没
2 齕	2 齕	2 齕	3 齕	2 齕	2 齕
3 紇		3 紇	1 紇:下没	3 紇	3 紇
4 淈	3 淈	4 淈	4 淈	4 淈	4 淈
5 搰	4 搰(=b)	5 搰	5 搰	5 搰	a 搰:胡骨
	5 扢			6 扢	
	6 秅			7 秅	
	7 𩡧	6 𩡧	6 𩡧	8 𩡧	c 𩡧
	8 掴	7 掴	7 掴	9 掴	d 掴
	a 鶻:胡骨				b 鶻
	c 𩿂				
	d 抇				

ほぼ同時代の『玉篇』その他の文献に見える痕韻入声開口小韻とされるものにしても，全て合口と見なしても差し支えないようなものばかりである。匣母小韻について以下のようになっている。『玉篇』反切で（ ）に入れてあるのは原本系玉篇ではなく，宋本玉篇の反切である。下線を付けた字は当該小韻と対応しないことを示す。参考までについでに挙げておく。

広韻	玉篇	玄応	慧琳	経典釈文
麧：下没切	音紇	——	——	——
秅	——	痕入声	——	——
齕	(痕没)	紇	痕入声	恨没/李音紇/郭胡突/恨<u>發</u>
紇	音齕	胡没	痕没/痕入声	劉胡没/恨没/恨<u>發</u>
淈	(胡没)	——	音鶻	胡忽/郭<u>古</u>没
搰：戸骨切	胡没	胡没	魂没/魂骨	胡没/<u>苦</u>骨/徐李<u>苦滑</u>

扢	——	——	——	——
柵	(核：戸骨)	——	——	——
聰	下兀	——	——	——
聞	——	——	——	——
扣	胡没	——	——	——
鶻	功忽	胡骨	音骨	音骨
爐	胡没	——	——	——
掴	——	——	——	——
爐	——	——	——	——
滑	——	——	——	胡没/李音骨

ここで一韻と見なすのに障害となるのは玄応音義の「秅：痕入声」と慧琳音義の「齕：痕入声」及び「紇：痕入声」であるが，両書とも切韻以降に成立したものである。恐らく『切韻』没韻に見られる二つの匣母小韻を処理するに当って，一方を開口小韻として見なした結果であろう。[4] このような音注が『切韻』と無関係に成立していたとは考え難い。

没韻開口字は切韻系韻書には匣母小韻以外には無いが，管見の及ぶ限りで，上田正『玉篇反切総覧』にそれと思しきものが挙がっている。今，上で示した匣母小韻を含め，該当例の全てを以下に示す。上田氏の分類に拠れば，開口は牙喉音声母小韻に限られる。対比のために，合口のものも挙げるが，これについては開口韻として現れた声母に関するものに限定する。唇音声母小韻は除く。

上田正『玉篇反切総覧』の没韻開合

没韻開口小韻	没韻合口小韻
見　扢：姑紇	堀：古兀
	愲：古突（＝葀）

		榾：古忽（＝緶）
		骨：故忽
		蔀：故歿
		篟：故没
		鶻：功忽
溪	𢿱：苦没	淈：苦没（反切上下字一致）
		揔：苦骨
		圣：口骨（＝骷，窟，嵧，髑）
		墘：口忽
		鼮：口没（下字一致）
曉	乾：呼突（→合口）	嘓：呼兀
		戇：呼没（＝忽，曶，颮）
		匼：呼骨（＝笏，鬵，總，榴，寣）
		疣：虚兀
匣	紇：音齕（→合口）	𩰫：下兀
	齕：痕没	搰：胡没（＝汨，𣲖）（下字一致）
	麧：音紇	鰨：胡骨
		核：戸骨

音注に用いられた文字の字面から判断すれば，いずれも合口と見なすことに問題の無いものである。「乾：呼突」の反切下字は合口字であるから，この小韻も合口と判断できる。「𢿱：苦没」も反切下字が唇音であるから，合口と判断しても良い。匣母の「齕：痕没」も同様である。となると，「紇：音紇」もまた合口となって，全て合口と判断できる。上田氏は恐らく『広韻』の分類に照らして，一部開口字の存在を認めたのであろうが，その前提を取り除けば，『玉篇』においても没韻開口字は存在しないと言える。

「麧：下没切」小韻を除いても，24痕韻に相配する入声韻 ət は，音理上

「偶然の空き間 accidental gap」であるから，なお実在の可能性を完全に否定することはできないが，結局のところ具体例は皆無ということになる。この他，当面の問題に関わるものとして『韻鏡』第17開に「麧」の他に存在する牙音清の「秅（当作紇）」，牙音次清の「稙（当作稙）」があるが，いずれも『集韻』に基づく増補である。『韻鏡』に見られる『集韻』による増補字は，大体が類隔切や中古音以降の音韻変化を蒙って反切上下字と帰字との間にズレが生じてしまったものを反切の字面に即して機械的に処理したようなもので，中古音では帰属を異にする。異なる体系の字音が混じりこんだと見なして無視して構わないものばかりである。[5]

そこでこの問題にウイグルという民族名の音訳漢字が関係してくる。ウイグルを表す音訳漢字には「回紇（また廻紇とも）」，「畏兀児」，「維吾爾」などの表記があるが，このうちの「回紇」は普通話では huíhé と発音する。「紇」は『広韻』では既に見たように「麧：下没切」小韻所属字である。つまり，この hé という読みは，この開口扱いにされた反切に基づいて捻り出されたものである。ウイグル語の側でグルの部分が中国語で開口扱いを受けるような発音になっていた可能性は無い。[6] 繰り返しになるが，「紇」は初期切韻では「鶻」と同音であった。「**搰**：戸骨切」小韻が出来た際に，「紇」は「麧：下没切」小韻所属のままで変わらなかったが，「鶻」の方は「**搰**」の後に位置していたため，「**搰**：戸骨切」小韻所属字とされて，『広韻』では「紇」と「鶻」は帰属を異にする（＝開合を異にする）ことになってしまったのである。この開合の対立が誤認に起因する人工的なもので，実際の音韻論的差異を反映するものではないことは既に説明した通りである。この二つの字はそもそも同音であり，「回鶻」を huíhú と発音するのであるから，「回紇」もまた huíhú と発音すべきであろう。

注

(1) 云母は増加小韻の「馮：有乾」を除けば，合口韻若しくは合口性韻尾を有する効，流摂，咸摂所属の韻としか結びつかない。この他，第１転開の東韻に「雄」，第12転開合の虞韻に「于」，麌韻に「羽」，遇韻に「芋」があるが，これらは合口と解釈する余地がある。

(2) この手の処理としてよく知られたものとして，『広韻』腫韻末尾の「湩：都鵗切」toŋ という小韻がある。その注に「此是冬字上声」とあり，この小韻は直後の「鵗：莫湩切」moŋ と１つの韻類を成している。上田氏の推定によれば，この二つの小韻は原本切韻には無かったようである。類例としてはこの他に臻韻上声及び臻韻去声の小韻が他の韻目に間借りしていると思われる例がある。具体的例は以下の通り。準韻（真韻上声軫韻合口）の崇母小韻「濜：鉏紉」；隠韻（殷韻上声）の荘母小韻「櫬：仄謹」と初母小韻「齔：初謹」；震韻（真韻去声）の初母小韻「櫬：初覲」。このうちの二つの初母小韻は上田正氏の推定では原本切韻に既にあったものである。遠藤1990によれば，王三の韻目小注から切韻が依拠した韻書のうちで呂静，陽休之，杜臺卿は切韻の真韻と臻韻を分けず，夏侯詠は臻韻と殷韻を分けていなかったということが知られる。切韻はこのような分韻の五家韻書から臻韻を抽出して真，臻，隠韻を分けた。上掲の小韻はそのような作業を行うに当って，分韻と所属を誤ったものであろう，ということである。原本切韻が既にこのような状況であったから，増補の過程で上掲の増加小韻が準韻，震韻のみならず，隠韻にも紛れ込んでいることは怪しむに足りないということになる。その一方で原本切韻の段階では蒸韻に相配する上声拯韻が韻目となっている「拯：無反語。取蒸之上声」の１小韻のみで，しかもこの１字しかないのに大韻としてわざわざ建てているというような例がある。これらを総合して判断すれば，結局のところ，原本切韻においては所属小韻が稀少であることを理由に大韻として建てず，他韻に間借りさせるといったような措置が取られるようなことはなかったであろうと考えられる。

(3) 「胡没反」は後に示すように，『経典釈文』，『玉篇』，『玄応音義』に見られるので，候補足りうるとして挙げたが，誤認の元となった反切がこれであった確証は無い。「搰」は『経典釈文』では「荘子音義」に見える次の１例のみ：「苦骨反。徐，李，苦滑反。郭，忽滑反。……一音胡没反」或いは六朝期の「苦骨反」若しくは「苦滑反」を『唐韻』（もし『唐韻』の処理が何らかの先行小学書に基づくものならば，その小学書）が「胡骨反」と誤認し，『広韻』ではそれが「戸骨切」と改められたのかも知れない。中国における実例を確認していないが，古鈔本玉篇に見られるように「古」を「胡」の省体として使用するような習慣が関与したならば，伝写の際にこのような誤認は十分に起こりうる。但し「苦骨反」は陸徳明の手になる反切であれば「苦骨反」は必ずしも六朝期まで遡れないものかも知れない。また「苦滑反」にしても陸徳明（或いは『経典釈文』成立後に後人）の手が加わって，六朝期の姿をそのまま留めていないかも知れない。六朝期小学書の逸文中にこの手がかりとなる反切を見出すことが出来れば良いのだが，今だそれらしきものは見つけていない。現時点では全て憶測に止まる。

(4) 両書とも仏典の音義書であり，本来韻書のように大韻の分類を云々する必要はないものである。だから先行小学書の反切を利用する場合に，その反切下字が何韻所属であるか，帰字と所属が一致するかについて配慮する必要はない。反切の字面をちょっと細工すれば済む。但し開口の下字に用いることができるのは，「麧」小韻所属字を除けば唇音字しかない。このため反切の字面を替えるにしても，開口であることを明示することにはならない。反切を捨てて，敢えて「痕入声」というような形式にしているのは，等韻学の知識に拠るものではないか。『韻鏡』

第17転開の一等匣母の欄を見ると，平声痕韻には「痕」，上声很韻には「很」，去声恨韻には「恨」，そして入声には「麧」がある。玄応の時代に『韻鏡』のような韻図が存在したかどうか証拠となるものはないが，反切の口唱の便のために，恐らく韻書に基づき「九弄図」のような声調のみ異なる字を並べたものが作成されていたことであろう。空海『文鏡秘府論』所伝「調四声譜」がどれだけ沈約の旧を伝えるものか分からないが，このようなものが特に釈家の間に早くから伝わっていた可能性は十分ある。ならば現存するもの以外にどのようなバリエーションがあったのか今では知りようがないが，『韻鏡』の窠字が「九弄図」の用字とよく一致することから考えると，没韻に二つの匣母小韻の存在する増補版切韻に基づき，「麧」小韻を開口と見なして，痕很恨麧と並べた「九弄図」の類が玄応の時代に既に存在していたとしても不思議ではない。そのようなものに基づいて「痕入声」というような音注がなされたものであろうか。興味深いことに，唐玄度『新加九経字様』（開成二年837完成）にはこの手の音注が少なくない。唐玄度については同書序に「朝議郎 権知沔王友 翰林待詔 上柱国 賜緋魚袋」とあるところから官位が分かるのみで，その事蹟については未詳。序にはまた「辨體觀文式，遵小學。其聲音謹依『開元文字』，避以反言。但紐四聲定其音旨」とある。余嘉錫は『四庫提要辨證』巻二経部二「九経字様」の条で，このことから『開元文字音義』は反切を用いず，四声相配する関係にある字音を用いて音注を施したのであり，『九経字様』の音注はそれを襲ったものである，とする（冊一 p.112-113）。新美1968所収『開元文字音義』逸文には「～反」の音注が見られるが(p.200)，出典は『慧琳音義』，『希麟音義』であり，これについては汪黎慶輯『小学叢残』二「開元文字音義」に「据『唐会要』載張九齢「賀御製開元文字音義状」，曰：「去嫌於翻字」。又唐元度『九経字様』序曰：「謹依『開元文字』，避以反言。」則是書概無反切。『慧琳音義』五引𨺅俱簍反，黧力奚反。殆琳公益，非其原本。」（開序一表），また「至遼釈希麟引『五経音義』，『韻会』二十四敬引『開元五経文字』。考『集賢注記』有敕依『文字音義』，改譔『春秋』，『毛詩』，『荘子音』。張九齢奏校理呂證譔『春秋音義』，鄭欽説譔『毛詩音義』。是即彼所引者，與『開元文字音義』截然二書。」（開序一表―裏）とある。『開元文字音義』の音注は恐らく「痕入声」というような形式のものが主であったろう。『開元文字音義』逸文中の反切は汪黎慶の言うように慧琳の増補したものか，或いは本来の「痕入声」式声注を慧琳が反切に改めたものであろう。もし後者であれば，そしてその書き換えが「痕入声」の「入声」のところを適切な反切下字にするようなものであったなら，それによって成立する反切は異調同音上字式反切となる。反切が全く存在しなかったかどうか，また，直音は存在していたかどうかといった点は手がかりが無いので判断の下しようがない。『開元文字音義』（天宝年間742-755 成書）以前に成立していた玄応音義（661 成書）に既に「痕入声」式音注が存在したことについては，上に述べたように釈家の間で等韻学を基礎にこのような音注が共有されていたと考えるべきではなかろうか。なお黄奭『黄氏逸書考』中『漢学堂経解』所収『開元文字音義』佚文には音注は見えない。更に推測を重ねることになるが，顔氏は顔之推以来，文字学を家学としており，代表的著作として顔師古『匡繆正俗』，顔元孫『干禄字書』そして顔真卿『韻海鏡源』がある。前二者は字体の正俗を問題とする，いわゆる「字様」というジャンルに属する字書である。もし『新加九経字様』がこれらの唐代の代表的字書を参照して編纂されたものなら，関連して顔真卿『韻海鏡源』の影響をも受けた可能性は少なくない。そして『韻海鏡源』が小川1953の所説の通り等韻学的性格の濃厚な書であるなら，『新加九経字様』の「痕入声」式の音注についても同様のことが言えるかも知れない。ならば『韻海鏡源』と『開元文字音義』は共に「痕入声」式の音注を有し

ていたことになるが，両者が何らかの影響関係を持っていたかどうか手がかりはない。『韻海鏡源』は天宝年間から大暦年間にかけて編纂され，大暦9年（774）完成。『開元文字音義』とほぼ同時期に成書を見ている。多くの文人が編纂に携わったとされるから，後世への影響は大きかったのではないか。残念ながら『韻海鏡源』そのものは断片すら残っておらず，いかなる注音形式であったかを知る手がかりもまた全く無い。逆にもし『韻海鏡源』の関与を否定する史実が明らかになれば，このような憶測の根拠は崩れる。確かに原本切韻にも拯韻の「拯」小韻に対し「取蒸之上声」と注記するような例があったと推定されており，分韻にも四声相配の原理が働いているから（このような措置も或いは等韻学の知識を利用した結果であるのかも知れないが，余りに大きな問題であり，本稿では扱えない），等韻学の助けを借りなくともこの手の注音は可能であったとも考えられる。必ずしも釈家―悉曇学と関連付けるべきではないのかも知れない。

(5) 『集韻』には「扢：古紇」，「𢢽：疑紇」とある。中古音の枠組みではぞれぞれ「骨：古忽」，「兀：五忽」小韻に属すべきものであろう。

(6) 庄垣内正弘氏のご教示を受けた。もし誤りがあれば，その責めはご教示を十分理解できなかった本稿筆者が負うべきものである。

参考文献

遠藤光暁 「臻櫛韻の分韻過程と荘組の分布」『日本中国学会報』42 1990.10 pp.257-270；後『中国音韻学論集』白帝社 2001.3 pp.67-81

平山久雄 「中古漢語の音韻」牛島徳次等編『中国文化叢書1 言語』大修館書店 1967.11 pp.112-166（音韻論第3章）

劉 復等 『十韻彙編』 国立北京大学出版組 1936 494p.

龍 宇純 『韻鏡校注』 芸文印書館 1960 318p.

新美 寛編 鈴木隆一補『本邦残存典籍による輯佚資料集成』京都大学人文科学研究所 1968.3 480p.

小川環樹 「等韻図と韻海鏡源――唐代音韻史の一側面」『中国語学研究会論集』1, 1953.9；後『中国語学研究』創文社 1977.3 pp.66-76

岡井慎吾 『九経字様箋正』商務印書館 1936.1（ノンブル無し）

上田 正 『切韻残巻諸本補正』東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター 1973.3 277p.

上田 正 『切韻諸本反切総覧』均社 1975.10 222p.

上田 正 『玄応反切総覧』自家版 1986.11 280p.

上田 正 『玉篇反切総覧』自家版 1986.12 563p.

上田 正 『慧琳反切総覧』自家版 1987.2 254p.

参考資料

切韻系韻書の没韻匣母小韻

ここで問題にしている没韻匣母小韻所属字は又音を有するものが多い。もし先行小

学書の反切を切韻の収録するに当たり，何らかの誤認が匣母開口小韻の成立に関わっているものならば，このような又音反切は何らかの手がかりになるものかも知れない。その他，当面の問題となるものを以下に掲げておく。

切三（S2071）「麧：〃，糈頭。下没反。五」，「齕　齧。又胡結反」，「紇　又胡結（反）」，「淈　〃泥。又古忽反」，「搰　掘地」

王一（P2011）「麧：下没反。麧，糈頭。八」，「齕　齧。又胡結反」，「淈　〃泥。又古忽反」，「搰　掘地」，「扢　摩。又公礙反」，「秅　秸」，「膗　膝病」，「掴　手推」

○「鶻　胡骨反。古（当作三）」，「搰　掘地。又下没反」，「聝　耳聲」，「抇　穿」

王二「紇　下没反。又胡結（反）。姓也。七」，「麧：〃，糈頭」，「齕　齧。又胡結反」，「淈　濁泥。又古忽反」，「搰　掘地」，「膗　膝病」，「若　手推」

王三「麧：下没反。九」，「齕　齧。又胡結反」，「紇，絲下」，「淈　〃泥」，「搰　掘地」，「扢　摩。又公礙反」，「秅　秸」，「膗　膝病」，「掴　手推」

唐韻「麧　〃，糈頭。『漢書』云，「食糠麧耳」。下没反。四」，「齕　齧也。又胡結反」，「紇　孔子父名。又胡結反」，「淈　〃渥。又古忽反」

○「搰　掘也。胡骨反。四加二」，「鶻　鳥名。又鷹属。又骨、猾二音」，「膗　膝病。出『説文』。加」，「掴　手推。出『説文』。加」

広韻「麧：麧糈。『漢書』云，「食糠麧」。下没反。五」，「秅　秸也。舂粟不潰也」，「齕　齧也。又胡結切」，「紇　絲下也。又孔子父名。又虜複姓三氏。北斉開府紇奚永楽。又有紇干（当作于）氏紇骨氏。又虜三字姓。後魏有賊師紇豆陵伊利。又胡結切」，「淈　淈泥。又古忽切」

○「搰　掘地也。戸骨切。十一（当作十）」，「扢　摩也」，「棚　果子棚也。出『聲譜』」，「聰　耳黧」，「聝　耳聲」，「抇　牽物動轉」，「鶻　鳥名。又鷹屬，又骨、猾二音」，「膗　膝病」，「掴　手推也」，「膗　膗，露出。見『字林』」，「滑　滑亂也。出『列子』」

［補注］　草稿の段階で平山久雄先生より，御自身の論考「切韻系韻書の例外的反切の理解について――「爲・遠支反」をめぐって――」『日本中国学会報』第14集1962 pp.180-196の「五　広韻等における真諄韻の分化条件について」（pp.193-196）で真諄韻の分化条件が重紐の問題と関係しているということを論じておられることを指摘して頂いた。小論筆者はこの論文を手元に置いてあったにも関わらず，うかつにもその存在を忘れており，杜撰とのみ考え，音声的必然とする解釈は全く念頭に無かった。コメント下さったことに深謝すると同時に自身の不明を恥じる次第である。ただこの真諄韻分韻の問題は小論の主眼ではないので，今回はさて措くことにし，他日別稿で論じることにしたい。